慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	遊女・萩・月：芭蕉俳諧一掬
Sub Title	Yujo, Hagi and the Moon as imagery : Basho's theory of Haikai
Author	檜谷, 昭彦(Hinotani, Teruhiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.305- 322
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0305

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

遊女・萩・月

――芭蕉俳諧一掬――

檜谷昭彦

1　萩のイメージ

元禄二年（一六八九）七月二四日、河合曾良（岩波庄右衛門正字）は松尾芭蕉に随行して金沢を発った。金沢滞在は九日間、その間曾良は病勝ちで、一七日には「翁、源意庵へ遊。予、病気故、不レ随」。とか、二一日は「高徹ニ逢、薬ヲ乞。翁ハ北枝・一水同道ニテ寺ニ遊。」とか、「予、病気故、未ノ刻ヨリ行（二二日）」、「予、病気故、不レ行。」（二三日）など、ほぼ七日に及ぶ身の不調は金沢出立後も快方に向わず、小松・山中温泉と行程を重ねても思わしくなく、加えて天候もいままでずっと快晴続きだったのに、小松に着いてから山中温泉までは「風雨甚シ」（二六日）、「夜ニ入、雨降ル」（二八日）、「雨折々降。（中略）夜中、降ル。」（八月三日）など、陽暦でいえば九月中旬の北陸道の気候になやまされ、これ以上師芭蕉に随行する状態ではなかった。八月五日曇天、曾良は小松での俳士（生駒万子）と芭蕉との会席を契約したあと、「即刻、立。」とある。その夜ひとりで大聖寺に泊った曾良に雨は二日間降り続き六日午後まで出立を足留めした。

以上はすべて芭蕉の「おくのほそ道」行脚に随行した『曾良旅日記』から援用した記述だが、この温厚篤実な信州上

誠訪出の武人が、師に随って遺した奥羽行脚の記録はさまざまな示唆に富む。芭蕉のほうはというと、小松における『おくのほそ道』本文の記述は、いきなり発句が記されていて、すなわち、

小松と云所にて

しほらしき名や小松吹萩すゝき

とある。これは『曾良旅日記』にいう「山王神主藤井伊豆宅へ行。有レ会。終テ此ニ宿。申ノ刻ヨリ雨降リ、夕方止。夜中、折々降ル。」（七月二五日）に照応する。また同じ曾良の『俳諧書留』には、

七月廿五日小松山王会

しほらしき名や小松吹萩薄　翁　（傍点論者）

廿六日同歓水亭会(1)　雨中也。

ぬれて行や人もおかしき雨の萩　翁

心せよ下駄のひゞきも萩露　ソラ

かまきりや引こぼしたる萩露　北枝

とある。右芭蕉句の「萩」はおそらく「萩」の誤記であろうが、それは後の問題として、ここでは一座の関心が「萩（はぎ）」に向いていたことを知るのである。後年曾良はこの旅中の回想を書き遺したが、それらのメモは甥の周徳が整理して天明三年（一七八三）に『雪満呂気』二冊に上梓した。その書にいう。

北国行脚の時、いづれの野にや侍りけん、あつさぞまさるとよみ侍りしなでしこの花さへ盛過行頃、萩薄に風のわたりしを力に旅愁をなぐさめ侍りて

しほらしき名や小松吹萩薄

と。さらに、この句を記録した梨一の『奥細道菅菰抄』の「附録」では、「同国小松歓水亭雨中の会」とし芭蕉の句を、

ぬれて行や人もやさしや雨の萩

としている。いま曾良の当年も、後年の記憶も、ともに当歳秋七月の行脚時の関心が、師芭蕉に従って〈萩〉の俳諧に傾いていたことを知ればよい。再度『おくのほそ道』本文の当該事項につけば、

曾良は腹を病て、伊勢の国長島と云所にゆかりあれば、先立て行に、

行〳〵てたふれ伏とも萩の原　　曾良

と書置たり。行ものゝ悲しみ、残るものゝうらみ、隻鳧のわかれて雲にまよふがごとし。

とある。曾良は江戸深川出立以来つき従った師との別れにのぞみ、「行き倒れるにせよ、萩咲く野でありたい」と詠んだのであった。だが意地悪い見方をすれば、師に別れてからの曾良は比較的元気で、旅日記の記載を辿ると、病にさしたる別条はなく関ヶ原を越え、同月一六日には伊勢長島の藩医森恕庵に診察を受けていた。以後「其夜ヨリ薬用」（日記）とあるにより曾良の病状を気遣う必要は私どもにはない。関心はこの旅中における〈萩〉に戻るべきであるし、その萩に掛かる語句が、「をかしき雨の萩」、「しほらしき……萩」、「やさしや雨の萩」とある事柄に注目せねばならぬ。くどいようだが曾良は芭蕉に心酔していたのだし、師の関心即曾良の俳諧であったことは疑う余地がない。つまり、ここでの〈萩〉は芭蕉俳諧の重要な関心事だったことになる。『おくのほそ道』終末の句に先立つ「種の浜」の句は、「浜はわずかなる海士の小家にて、佗しき法花寺あり」の文に続き、「浪の間や小貝にまじる萩の塵」とあり、『ほそ道』終章の感懐が〈萩〉に象徴される秋のイメージに読者を誘う趣きを示していることが明らかだからである。これはどうい

うことなのか。

『ほそ道』本文の記述をたどると、所収句中、最初に「萩」があらわれるのは越中路「市振」の条においてである。『奥の細道通解』（安政五年成）に馬場錦江が「此の条は、此の紀行に恋を出せる一巻の模様なるべし」と説いたように、新潟の遊女二名と相宿した芭蕉が、翌朝旅立ちの際、同行を求められそれを断わる話柄は、俳諧一巻における恋の座として、市振の条を意識していたことを物語っている。旅立ちの朝同行を乞われ、

不便の事には侍れども、我〳〵は所々にてとゞまる方おほし。只人の行にまかせて行べし。神明の加護、かならず恙なかるべしと、云捨て出つゝ、哀さしばらくやまざりけらし。

一家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば、書とゞめ侍る。

とある句が、「萩」の初出なのである。さらにまた、この句についてはすでに周知の事実として、『おくのほそ道』執筆時の芭蕉創作句なのであり、「曾良にかたれば、書とゞめ侍る」はずの『俳諧書留』にも『曾良旅日記』にも該当する記事も句も皆無である。明らかに虚構なのであり、それだけにこの条に「萩」が初出することは、意図的な芭蕉の紀行文構成意識を告げているように考えられる。再度云えば、ときに曾良四一歳、すでに薙髪した元長島藩士は、この旅に備え『延喜式』から神名帳の抄録を作り、別に歌枕覚書をも用意していた。「性隠閑をこのむ人にて交金をたつ」（『雪満呂気』）といい、「門葉の曾良は長途の天、枕となり柱となり」（『陸奥衞』巻五序）して師を援けたこの人が、師に言われ「一家に」の句を書き忘れるはずはないからである。こうみてくると、市振の条における「一家に」の句は、奥羽行脚後の芭蕉が、この旅中の処々で催した俳諧をふり返りつつ、重ねあげみがきあげた詩心の結晶として提示

された句と考えるべきだろう。それを少しく以下に考察して行くことにする。

2　那須野と市振の対応

『おくのほそ道』前半の「那須」の条に視点を移すことからはじめたい。この条には、那須野を行く芭蕉と曾良が、野飼いの馬を草刈る男に借りて俳人翠桃（『ほそ道』本文では桃翠）の住む黒羽に向かう記事がある。その二人のあとを子供が二人、馬のあとをなつかしがって走ってきた。

ちいさき者ふたり、馬の跡したひてはしる。独は小姫にて、名をかさねと云。聞なれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名成べし　　曾良

頓て人里に至れば、あたひを鞍つぼに結付て馬を返しぬ。

というのである。句の意は、かさねというのだから花にたとえたら花弁のかさなった八重撫子の名であろう、というので、鄙の小娘のやさしさを詠んだ句である。馬を借りた話は『蒙求』の故事や謡曲『錦木』・『遊行柳』によっているようだが、かさねについては元禄三年の「賀重」なる芭蕉真蹟の俳文もあり、これは事実と思われる。岩波版大系本から引用すれば、

みちのく行脚の時、いづれの里にかあらむ、こむすめの六つばかりとおぼしきが、いとさゝやかに、ゑもいはずおかしかりけるを、「名をいかにいふ」ととへば、「かさね」とこたふ。いと興有名なり。都の方にてはまれにもきゝ侍ざりしに、いかに伝て何をかさねといふやあらん。「我子あらば、此名を得させん」と道づれなる人にたはぶれ侍しを思ひいでて、此たび思はざるゑんにひかれて名付親となり、

賀重

いく春をかさね〳〵の花ごろも
しはよるまでの老もみるべく　　ばせを

とある。「道づれなる人」は当然曾良だし「我子あらば」この名をつけたいとまで芭蕉は「かさね」に執心しているのである。それなのに『ほそ道』本文には、芭蕉自身の句が記されず、曾良の句だけが載っているのだ。そしてこの曾良の句もまた『俳諧書留』に見えないのである。すでに多くの先学が指摘するごとくこの句は芭蕉の代作とみるべきだろう。それも「一家に」の句と同様に行脚時より後年のことに属すると考えてよい。つまりこの条も意図的な虚構によって構成されていることになる。桜井武次郎氏はこれについて「『聞きなれぬ名のやさしかりければ（いかに伝へて何をかさねといふやあらん）』という芭蕉の問いに対する曾良の答えをそのまま発句の形にした体で、『ほそ道』の中の曾良の役割の一つがそのようなものであったと知ることが出来る。」（『芭蕉入門』有斐閣新書第六章）と述べられている。

こうして『ほそ道』前半の那須の条は、遠く後半の市振の条と相呼応するかのように、相似的な形態をもって表裏の関係を示していると読みとれるのである。1　あとをしたい走る二人の子供（那須）と、同行を乞う遊女二名（市振）、2　かさねというやさしい名に寄せる執心（那須）と、遊女に別れたあとに残る「哀さしばしやまざりけらし」という思念（市振）、3　曾良に仮託した句作の虚構（那須）と、「一家に」の句にみる虚構（市振）、4　俳諧の恋の座に通う両者の味わい、それは前出曾良の『雪満呂気』の記事にも「なでしこ」と「萩」が並列的に記憶されていたことからも傍証できる。などと整理できようか。

ところでこの那須の条は、『旅日記』によれば翠桃宅到着が四月三日、それから一六日まで滞在中に那須へ赴いてい

るから、『ほそ道』構成上話が「くどくならないように考えた上でのアレンジ」（桜井武次郎氏前掲書）がほどこされているとみるべきだろう。さらにこの条は白河の関越えにかかる前で、本格的な奥羽行脚開始寸前の、心温まる少女の情感を伝えた一節と読むこともできる。またこの滞在中に『ほそ道』の旅での最初の歌仙が巻かれたことも注目すべきで、この歌仙には次のごとき連句が詠まれているのである。

碪（きぬた）うたるゝ尼達の家　　曾良
あの月も恋ゆへ（え）にこそ悲しけれ　　翠桃
露とも消ね胸のいたきに　　翁
錦繡（きんしう）に時めく花の憎かりし　　曾良

この歌仙は「蔦（まくさ）おふ人を枝折（しおり）の夏野哉」を発句とするもので、右の付合（つけあい）には、砧―月という常套的なあしらいのなかに、尼―恋―露と続く一連の情趣が描かれている。「一家に」の句にみられる遊女・萩・月の取り合わせの萌芽とはまだ言えないが、恋の句の新境地を模索するかのような連俳と読めなくはない。さらに言えば、白河の関を越えるに際し曾良が詠んだ「卯の花をかざしに関の晴着かな」に呼応する〈かざし〉が、加賀の地へ向かう市振の関越えに際し、芭蕉にどう関わったかの問題も、はるかに志向できるだろう。

かくて那須の条を起点として市振における「一家に」の句の成立因由を、曾良の『俳諧書留』などを中心に探っていくことになった。それには旅の途次に巻いた歌仙から、月の座・恋の座に関わる芭蕉と曾良を主にした連句・付合を抽出する作業がまず必要となる。こうした考察については、すでに米谷巌氏にすぐれた論が備わっている。氏は出羽大石田で巻いた「最上川」歌仙から、

星祭る髪はしらがのかるゝまで　　曾良

集に遊女の名をとむる月　　翁

の付合をあげ以下のように説かれている。「前句は、老女小野の小町が、七夕の夜、関寺に招かれて星祭の童舞を見物するという、謡曲『関寺小町』に拠ったものである。芭蕉の付句は、謡曲『卒都婆小町』を媒介にして、小町が『古へは遊女』（『類船集』）であったとする俗説をふまえて句作りしたものであった。芭蕉が市振の条で、『七夕』の句に続く恋の秘曲の前ジテに『遊女』を登場させたのも、同じパターンの連想によるものであった。」とされる。(2) 傾聴すべき卓論であり本稿はその驥尾に付す以外にないのだが、やはり「一家に」の句における「萩」のイメージが私には気がかりである。俳文学の専攻でもない私にはすでに解決ずみの問題を云々しているのではないかという危惧の念もある。不明は当初から叱正を乞うことを前提として、しばらく芭蕉の付合を追うことにする。

3　萩と月の照応

四月二三日（元禄二年）須賀川の等躬宅での「風流の」の歌仙には有名な恋の付合「宮にめされしうき名はづかし　曾／　手枕にほそき肱をさし入て　翁」があり、それに続く句に、「何やら事のたらぬ七夕　等躬／　住かへる宿の柱の月を見よ　曾／　薄あからむ六条が髪　翁」が見出せる。「六条」はおそらく源氏の六条御息所の生霊を言ったものだろう。星祭（七夕）―月―宿―あれにし庭―薄―小町が幽霊（『類船集』付合を私に整理）という連想が生む付合である。

五月二九・三〇両日の出羽大石田高野一栄宅での興行「さみだれを」の歌仙には、前出の「星祭る」と「集に遊女の名をとむる月」の付合がある。これは米谷氏の指摘とともに西行の『撰集抄』九の一一の「江口遊女成ㇾ尼事」の話が、

『類船集』遊女の項のコメントなどとともに背景になっていたことも当然の知識であった。次に六月二日、新庄の風流亭での興行「御尋に」の歌仙には、

雪ふらぬ松はをのれとふとりけり　柳風
萩踏(敷)しける猪のつま　翁
行尽し月を燈の小社にて　孤松（傍点論者、以下同）

の付合があり、はじめて萩と月の照応があらわれる。ついで六月四日羽黒山での興行「有難や」の歌仙には、

糸に立枝にさま〳〵の萩　梨水
月見よと引起されて恥しき　曾良
髪あふがするうすものゝ露　翁

の付合が見出され、萩と月と恋の座がようやく芭蕉の主導によってフォルムを整えつつあるさまがうかがわれる。また六月一〇日鶴岡の長山重行宅の歌仙「めづらしや」の巻には、

赦免にもれて独リ見る月　翁
衣〳〵は夜なべも同じ寺の鐘　露丸
宿クの女の妬きものかげ　曾良

があり、月と恋と「宿場女」つまり遊女があらわれてくる。こえて七月六日直江津で、芭蕉は「文月や六日も常の夜には似ず」の句を作った。これは『俳諧書留』に「香は色々に人〳〵の文　曾良」で終わる二十句迄の未完の歌仙として記載されている。のちに『ほそ道』本文に「荒海や佐渡によこたふ天河」の句に先立って並置され、続く市振の遊女との出逢

いを誘発する〈呼出しの恋〉として設定されることになる。この連句中にはまた、「数々に恨の品の指つぎて　義年／鏡に移す我がわらひがほ　翁／　あけはなれあさ気は月の色薄く　左栗」という付合があることも注意しておこう。

七月八日、芭蕉は直江津から高田に着いた。雨は止んでいた。『旅日記』には「細川春庵ヨリ人遣シテ迎、連テ来ル。春庵ヘ不レ寄シテ、先、池田六左衛門ヲ尋。客有。寺ヲかり、休ム。又、春庵ヨリ状来ル。頓テ尋。発句有。俳初ル。宿六左衛門、子甚左衛門ヲ遣ス。謁ス。」とある。その俳席を『書留』に検すれば、「薬欄にいづれの花をくさ枕　翁／　荻のすだれをあげかける月　棟雪／　炉けふりの夕を秋のいぶせくて　更也／　馬乗ぬけし高藪の下　曾良」の四句のみである。ここでは萩ではなく荻と月が詠まれていた。だが、芭蕉俳諧にみる諸書の伝えには萩と荻の混乱が多いのも事実で、曾良の誤記がここにもあったと考えられなくはない。すでに述べたごとく、七月二五日小松における芭蕉句を『書留』は「しほらしき名や小松吹荻薄」と誤記しているし、ここでも「荻のすだれ」で充分に意が通る句作りだからである。しかも萩と荻は俳諧付合上きわめて密接な関係にあり誤り易い表記のゆえもあった。

荻　ヲギ　いね科の多年生植物。水辺・湿地に多い。ススキに似るが、群生してもほとんど株にならない。秋、銀白色の花穂を出す。かぜきぎぐさ。めざましぐさ。

萩　ハギ　まめ科の落葉小低木。秋、紅紫色または白色の、小さな蝶に似た形の花が、しだれた枝にたくさん咲く。秋の七草の一つ。（岩波国語辞典第三版）

右、手許の辞書に見ても、六月以降の芭蕉の関心事は、明らかに萩に傾いていたようで荻のイメージとは程遠いと思われる。いちおう芭蕉の関心が〈萩〉をめぐる俳諧にあったとしておこう。

この稿ではまだ「一家に」の句における〈遊女〉への考究が行われていない。それはまた事新しく採りあげるまでも

ない資料によるしかないのだが、論の成行きから避けて通れぬ性格のものでもある。できるだけ簡略化しつつ「山中三吟」を瞥見しよう。

4　遊女の句

元禄四年（一六九一）五月二六日刊の井筒屋版『卯辰集』は、加賀金沢の北枝（立花氏）が俳人楚常の業を継いで増補編集した俳書で、このなかに芭蕉が加賀山中温泉で北枝・曾良の両名と巻いた歌仙一巻が収められている。芭蕉は北枝と七月二七日から八月五日迄山中温泉に滞在した。本稿冒頭に記したように、八月五日病勝ちの曾良は伊勢に先行する。この「山中三吟」は曾良への餞別として興行されたもので、北枝の「馬かりて燕追行くわかれかな」を立句とする一名「燕歌仙」である。この三吟は芭蕉が指導添削を重ねて成ったもので、そのときの筆録を北枝は草稿のまま遺していた。これを金沢の俳人可大が天保一〇年（一八三九）八月に出版した『やまなかしう』に収めている。「曾良餞／翁直しの一巻」がそれである。その歌仙の六句めから九句めにかけて次の付句がある。

柴かりこかす峯のさゝ道（笹）　翁

たどるとも、かよふとも案事玉ひしが、こかすにきハまる。

「松ふかきひだりの山は菅の寺　枝

柴かりこかすのうつり、上五文字霰降ると有べし、と仰られき。

「役者四五人田舎わたらひ　良

遊女と直し。

「こしはりに恋しき君が名もありて　翁
落書にと直し玉ふ。

のごとくである。いま芭蕉の添削に従って『卯辰集』所収句に書き替えてみる。

柴かりこかす峯の笹道　翁
霰降左の山は菅の寺　北枝
遊女四五人田舎わたらひ　曾良
落書に恋しき君が名も有て　翁

まずこの「遊女四五人田舎わたらひ」については、柳田国男の「遊行女婦のこと」（『木綿以前の事』所収）に名高い論考がある。柳田は七部集『ひさご』第三の歌仙から、「それ世は泪雨としぐれと　里東／　雪舟に乗越の遊女の寒さうに　野径／　壹歩につなぐ丁百の銭　乙州」を引いて、越後の遊女の哀れな生活を説き、さらにゴケ・村ゾレの姿態を描き、よるべない女たちが、「すがれて浮草のさそふ水も無くなると、却つて群をなして遠く天涯の旅をも試みなければならなかつたのである。是が曾良などの眼を留めた、遊女の田舎わたらひであつたらうと思はれる。」（同論文）と説いた。「田舎わたらひ」とは活計の資を求め諸所をへめぐる一所不住の生活をいう。それは「なりはひ」に対し「すぎはひ」とも質を異にする。その意味でこの「遊女四五人」は市振の遊女二名とも近接する。市振の遊女は伊勢参宮に向かうのだから、おそらく〈抜参り〉の一種と見られるが、それでも『ほそ道』本文にいう「白浪のよする汀に身をはふ

らかし、あまのこの世をあさましう下りて、定めなき契、日々の業因、いかにつたなし」（市振の条）と書く芭蕉の筆は、この「山中三吟」の添削を思い浮べなかったはずはない。曾良の「役者四五人」を「遊女」と直したのは芭蕉その人である。「落書に恋しき君が名も有て」という芭蕉の句には、安宿の一室のさまが目に浮かぶようだし、君（遊女）の源氏名に旅の情を深める〈わたらひ〉の境涯がより鮮明である。北枝はこれを草稿としていまに伝えた。とすればもうひとりの曾良はどうだったのか。この三吟に曾良は名残の表二句めを残し師に先行した。ために「銀の小鍋に出す芹焼」の句を最後に、あとは芭蕉と北枝の両吟となる。だから曾良が『ほそ道』本文に顔を出すのは最終条「大垣」においてであって、本文はこの場面を「駒にたすけられて大垣の庄に入ば、曾良も伊勢より来り合、越人も馬をとばせて、如行が家に入集る。」と描いている。芭蕉の大垣入りは八月二一日前の由で、それに比し曾良の大垣到着は九月三日である。翌四日晴、浅井源兵衛（左柳）宅、蕉門句会が催され「はやう咲九日も近し宿の菊」なる芭蕉句を立句とする歌仙が成る。その名残の表の終わりから裏へかけての六句を左に示す。それは、

美くしう顔生付物憂さよ　越人
尼に成べき宵のきぬ〴〵　路通
月影に鎧とやらを見透して　芭蕉
萩とぞ思う一株の萩　荊口
何事も盆を仕舞て隙に成　此筋
追手も連に誘ふ参宮　曾良

のごとくである。右六句、美女の物憂さから衣々の別れへ、それもゆえあって恋を捨て尼になる宵の衣々、『去来抄』

には「いか様可然武士の妻と見ゆるなり」(修行教) とあり、ついで月ー萩が出て曾良の句に至って伊勢参宮への抜参りの追手をも誘う奉公人の生態を描く。恋の座と月の座とに関わる〈萩〉のイメージはさらに明確なものに成長しつつあったと言えるのではあるまいか。

越の遊女と旅の宿と、その庭前の萩の花のたよりない開花期と、月の光と、米谷厳氏の言を再度借りれば「哀艶きわまりなき新涼月下の夢幻劇」(前掲論文) は、こうして奥羽行脚の途次に徐々に醸成され、さらに多くの検討や推敲を経ながら、試行錯誤のくり返しのうえに成った短詩型の詩ではあった。そして、元禄三年の歳末と推定される「年忘歌仙」を私たちは逸するわけにいかない。京上御霊社参詣の後、別当示右亭で興行した一巻には、

月ほそく小雨にぬるゝ石地蔵　史邦
世は成次第いも焼て喰フ　凡兆
萩を子に薄を妻に家たてて　芭蕉
あやの寝巻に匂ふ日の影　示右

なる付合がある。「萩を子に」の句は、西行『撰集抄』六の八「信濃佐野渡禅僧入滅之事」によるかという岩波文庫の中村俊成・萩原恭男両氏の脚注がある。次句「あやの寝巻」はまた嵯峨野に隠れた小督の局の連想によるかと両氏は指摘される。これについての柳田国男『俳諧評釈』はいま私の採るところではない。月と萩と恋の移りとが、ここでも大きく関心を引いていることを指摘できればよい。

奥羽行脚の後二年、上方に滞在した芭蕉に『おくのほそ道』成稿の心用意はなかった。彼がこの紀行文執筆を思い立ったのは、元禄五年(一六九二)五月に江戸へ戻り芭蕉庵に入ってからで、素龍に清書させたのは元禄七年四月のことであ

る。いうまでもなく出版は没後八年の元禄一五年（一七〇二）であって、そうみると「一家に」の句作は上記種々の歌仙興行のさらに後年に属するとみてもよいような気がする。奥羽行脚途次、ことに越後・越中路にかかってからの芭蕉の旅は、いろいろな意味で難渋をきわめた。『曾良旅日記』からうかがえる状況では、土地土地の有力者への紹介状が不備で、思わぬ行違いや誤解を生んだようであるし、雨天と暑さに両名とも不快の極に達していた形跡がある。あの市振へ着く当日など、七月一二日のことだが晴天のなか能生を発って糸魚川のさきの早川を渡るとき、「早川ニテ翁ツマヅカレテ衣類濡、川原暫干ス」と『旅日記』は伝える。翌一二日市振を発った両名は富山県の入善に入り黒部四十八が瀬を渡るのだが、このときも曾良によれば「入善ニ至テ馬ナシ。人雇テ荷ヲ持せ、黒部川ヲ越。」という有様だった。この日も翌日も暑さはきびしかった。一四日には「翁、気色不レ勝」（高岡着）とある。供の曾良も同様だったろう。そして一五日に目指す金沢へ着いて愉しみにしていた俳人一笑に会おうと思ったら、去年一二月六日に死去したことが知らされるのである。「塚もうごけ我泣声は秋の風」はこのときの吟だし、ここには芭蕉の真情がこめられている。だからこうした状況下で市振の宿における「萩と月」の照応が考案できるはずはまずあるまい。金沢、小松、山中の滞在を通じ、曾良との別離を経などして、ゆるやかに恢復する芭蕉の心象にそれは時間をかけて根ざして行ったのであったろう。市振の虚構はこうして行脚後はるか後年のことに属すると私は推定したいのである。

5　関より西は能登の国

元禄四年八月中旬、探志（たんし）・正秀（まさひで）・昌房（しょうぼう）など膳所の連衆との興行において（御明（みあかし）の歌仙）、その名残の折の付句に市振の地名が再出する。

おはるゝごとに法華あらそふ　翁

一振の関より西は能登の国　正秀

浄瑠璃やめて説経にする　盤子

風筋に片はら町を吹まくり　及肩

の付合である。能登は浄土真宗の強い影響下にあったこと、説経節は在所を渡り歩く唱導芸能であったこと、風の吹き散る北陸の定めなき日和を考えれば、右の付合が意味する市振の状景は明らかだろう。ここには市振の関を越えればもう能登路だという旅人の心躍りを伝える蕉門の意向がほの見える。『ほそ道』本文に戻っても、この行脚中たしかに越中路は語るべき材がなかったことに思い当たる。当時市振を発ち少し行った玉木村（現、青海町）が越後・越中の境になっていた。川を渡り堺村（現、朝日町）に加賀藩の番所があった。右玉木村は市振より十四、五丁の距離だと『旅日記』は記している。

この行脚の事情を後年ゆっくりと回顧したとき、右の事情のもろ〳〵を踏まえて、芭蕉には市振の地理的状況が自ずと理解されたことだろう。米谷氏の指摘のごとく、市振から一里ほど東南の上路の山を舞台とする謡曲『山姥』がこのとき芭蕉に想起されたことも首肯できる。そうではあるが芭蕉の主体はこと「萩」の抒情に上述のごとく後年明らかにかた寄っていた。『旅日記』にみれば市振の夜は当夜晴天である。月の記述も萩のそれもまったく見当たらないが、芭蕉は本文執筆時この越後・加賀の境界を扼する孤岸・僻陬の海辺の宿場に、新潟（越）の遊女二名を拉し来てそこに萩の花と月光を置く縹渺とした詩情を描くことに、『おくのほそ道』全構成の眼目を考えたのではないかと想像するのである。白河の関を越える直前の心躍り（那須）と同様にここには加賀へ向かう前夜の夢幻劇の構成が用意されていた。

もうひとつ例証すれば、すでに早く貞享五年（元禄元年一六八八）六月五日の尚白筆懐紙には、

追れて鹿の子を捨て行　芭蕉
中の秋嵯峨なる竹を切せけり　通雪
三線ちかく萩をふみおる　奇香
うき人をほめてはそしる月の前　尚白
大勢よせてあそぶたはれめ　宣秀

の付合があった。「萩をふみをる」は小督の局を暗示し、その琴を三味線に俳諧化し、萩ー月ー遊女の付合がここには早く完成していたのである。嵯峨と小督の局、萩と嵯峨野は付合でもある（『類船集』）。

こうしてみれば芭蕉俳諧における萩のイメージは元禄初頭より持続された恋の座のライトモチーフだったと言うべきだろう。前述の付合中にみる法華争いの句についても、市振の宿場内の地名に「浄土」があることをみて納得が行くはずだ（大日本地名辞書）。ともあれ市振は当時の関所だったのである。

×　×　×

那須の条の小姫かさねから市振の遊女へ、那須のなでしこから、『ほそ道』本文をたどれば、卯の花・紅粉の花を詠んで萩にいたる。天候でいえば五月雨から秋へ、そして月並ながら『ほそ道』巻頭の「行く春」から終末の句の「行く秋」まで、『おくのほそ道』は芭蕉によって自在に虚構化された文芸作品ではあった。卯の花が白河の関の〈かざし〉であったように、萩は市振の関の〈かざし〉としての表象である。それだけに市振の遊女と萩と月の統一は、僧形の芭蕉と曾良両名による遊女同宿の侵犯性を内包するがために、かえって神韻縹渺たる詩情を伝え、ある種の危機を孕んで

こんにちの読者に語りかけるものがあるのではなかろうか。

注

(1) 「廿六日、朝止テ巳ノ刻ヨリ風雨甚シ。今日ハ歓生方へ被レ招。申ノ刻ヨリ晴。夜ニ入テ、俳、五十句。終テ帰ル。庚申也。」(『曾良旅日記』)などの記事がみえる。

(2) 同氏「恋の座」、白石悌三・乾裕幸編『芭蕉物語』(有斐閣ブックス)所収127～128頁参照。

追記 この稿の前身は昭和三七年(一九六二)一二月の本塾大学通信教育部の雑誌『三色旗』に、「遊女の句—芭蕉と曾良」と題して掲載したものである。その後、先学の新見に導かれ私の考察も大きく変化した。今回旧稿をまったく改変し根本から論を立て変え、新たに考察を試みた。したがって旧稿をまったく廃棄しこの小考を提出することにした。